

ZENBI

全国美術館会議機関誌

February 2024 [Vol.25]

Feb. 2024

美術品を守る。

イオケミシート

展示ケースの床面・壁面等にひろげて使用することで、ケース内のガス濃度を低減します。

イオケミパッド

調湿スペース、展示台の裏、収納棚や保管箱などに設置できます。



本社 〒164-0012
東京都中野区本町 1-32-2 ハーモニータワー 28F
TEL:03-5352-7202



▼購入はこちら▼



CONTENTS	
ブロック報告 2023年4月～10月	
2	〔北海道〕 節目の年と、次なる展開 細矢久人
4	〔東北〕 “ならでは”の鑑賞体験 篠原英里
6	〔関東〕 挑戦する公立美術館コレクション展 篠原誠司
8	〔東京〕 新しい傾向、試みと継続すべきこと 音 ゆみ子
10	〔北信越〕 北信越ブロックにおける地域密着型の企画展について 児矢野あゆみ
12	〔東海〕 地域美術の発信 和歌由花
14	〔近畿〕 コレクションを見せる 知野季里穂
16	〔中国〕 身近な存在であるために 大山真季
18	〔四国〕 上半期の四国の美術館活動 柳澤宏美
20	〔九州〕 地域につながり、ひらいていくこと 稲葉麻里子
部会報告	
22	—— 保存研究部会 邊牟木尚美
23	—— 教育普及研究部会 鈴木麻里子
24	—— 情報・資料研究部会 鴨木年泰
25	—— 小規模館研究部会 坂本博孝
26	—— 美術館運営研究部会 安田篤生
27	—— 地域美術研究部会 重松知美
追悼 原田平作先生 尾崎信一郎 29	
防災を見つめて100年 福井浩明（エア・ウォーター防災） 30	
賛助会員各社 31	
事務局から 32	
専門委員会から 33	
投稿要領 36	
ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 36	
編集後記 37	

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.25 2024年2月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

〔編集〕 (一社)全国美術館会議 広報委員会

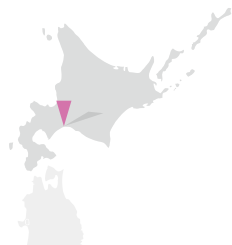
〔発行者〕 (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

〔デザイン〕 宮谷一孝 〔印刷〕 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

節目の年と、次なる展開

細矢久人 (ほそや ひさと・苫小牧市美術博物館)



冒頭から恐縮ではあるが、筆者自身の所属する苫小牧市美術博物館の話題からはじめさせていきたい。元来、博物館として開館した当館は、去る7月に美術館部門を加えた美術博物館としてのリニューアル・オープンから10周年を迎えた。その記念として、2023年度は2本の特別展を開催することとなった。1本目の「縄文≒現代〜共鳴する美のかたち」展(7月15日〜9月3日)は、青森県立美術館の協力により実現した特別展であり、「縄文／考古」と「現代／美術」という複合施設ならではの視座に基づく展示であった。岡本太郎、草間彌生、立石大河亞など戦後日本の美術を牽引してきた作家や北海道ゆかりの現代作家の作品に対し、縄文時代の土器・土偶などの遺物を比較することにより、時代を超えて通底する人間の普遍的な精神について探る契機とした。なお、同展と同時期に、北海道・北東北の縄文遺跡群のユネスコ世界遺産登録(2021年)を記念した特別展「北の縄文世界と国宝」(7月22日〜10月1日)が北海道博物館において開催された。国宝8件28点、国指定重要文化財38点を含む約480点が一堂に会した同展は、縄文文化の奥深い精神文化に改めて触れる貴重な機会となった。

特別展の2本目は、出光興産北海道製油所の操業50年を記念して開催された「出光美術館近代美術名品選 四季が彩る美の世界」展(9月23日〜11月19日)である。同展はその名のとおり、出光美術館のコレクションを通して、日本の近代

美術における草花や鳥、移ろう季節の様相をたどった。出光美術館というと、むしろ近代以前のコレクションの充実が印象深いが、板谷波山、小杉放庵、富岡鉄斎らの優品が並ぶ本展からは、同館の懐の深さを改めて感じさせられた。

ほぼ時期を同じくして、北海道立近代美術館において、札幌テレビ放送創立65周年を記念した特別展「足立美術館所蔵 近代日本画と北大路魯山人展一和の美、再発見。」(9月16日〜11月12日)が開催された。同展は足立美術館のコレクションから上村松園、竹内栖鳳、横山大観らをはじめとする近代日本画と、北大路魯山人の陶芸や書を紹介する内容であり、去る11月5日には、観覧者数30,000人に到達したという情報も舞い込んでいる。近年、人気が下火になってきたかのようにも映る日本近代美術ではあるが、そうした盛況ぶりからは、同コレクションの充実と共に、ここ北海道における変わらぬ関心の高さが窺い知れる。

上述の展覧会は、いずれもコレクションの力とでもいうべきものを改めて感じさせる内容であったように見受けられる。一方で北海道では、「札幌国際芸術祭」を筆頭に、現代作家を取り上げる展覧会についても一定数、開催されている。そうした道内の現代美術の様相についても、以下、少しばかり触れていきたい。

札幌市を拠点に活動を展開するベテラン作家を取り上げた企画展「札幌美術展 艾沢詳子 gathering—集積する時間」(札幌芸術の森美術館、

4月15日〜6月11日)は、これまで北海道内の各美術館で足跡を残してきた、同作家の集大成とも言える屈指の展覧会であった。一貫して生命のありようをテーマにした作品を制作し続けている艾沢は、近年、ティッシュペーパーや古紙などをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションを展開している。2018年度以降、艾沢には当館の展示企画にも2度にわたり参加いただき、公立千歳科学技術大学との連携による、無数のオブジェに対するライティングや、人の動きに呼応するセンシングといった光工学を取り入れた実験的とも言える作品の進化に立ち会う機会を得た。そうした経緯もあり、同作家の個展の実現は筆者としても感慨深いものがあった。

最後に、開催時期の近づく「札幌国際芸術祭2024」(1月20日〜2月25日)に触れて、本稿の締め括りとしていきたい。コロナ禍の影響により前回、冬季の実施が目論まれながらも、中止を余儀なくされた同芸術祭であるが、今回も時期を同じく「LAST SNOW」をテーマにその実施が予定されている。去る10月6日の記者発表によると、北海道立近代美術館を筆頭に、札幌芸術の森美術館、さっぽろ雪まつり大通2丁目会場など、札幌市内の6

ヶ所での実施が準備されているという。ちなみに、同芸術祭に出品する美術家の一人、国松希根太は、「THE SNOWFLAKES」※の一員として、当館で同時期に開催する同名の特集展示(12月9日〜3月24日)にも参加いただくことから、同展は同芸術祭の連携事業として位置づけられている。札幌へお立ち寄りの際は、近隣の苫小牧にもぜひ足を運んでいただきたい。

ここまで、当館の展覧会活動にこと寄せつつ、前半を美術館同士ないし企業との連携に由来する記念展、そして後半は現代作家の活動を発信する展覧会について触れてきた。一見すると両者は相対するベクトルを有するようにも映るが、コロナ禍を経て一定の落ち着きが戻りつつある今、とりわけ、当館のような地方小規模館の次なる展開を見据えた時、いずれもその根幹を成す重要な要素であることはいうまでもない。節目の年の慌ただしい日々の中、改めてそうしたことを考えさせられる半年間であった。

※2020年に飛生アートコミュニティ(北海道白老町)で結成されたアーティストコレクティブ。メンバーは発案者の奈良美智、同アートコミュニティの国松希根太、小助川裕康、奥山三彩の4人により構成される。海岸に打ち寄せられた漂着物を組み合わせたインスタレーションを主として制作している。



苫小牧市美術博物館「縄文≒現代〜共鳴する美のかたち」展 会場風景



札幌芸術の森美術館「札幌美術展 艾沢詳子 gathering—集積する時間」会場風景

“ならでは”の鑑賞体験

篠原英里 (しのはら えり・八戸市美術館)

はじめに、東北の広さについて念押ししておきたい。筆者は徳島県出身で、大学時代を東京で過ごし、青森県の八戸市美術館に勤めて8年目になる。北東北で暮らしてまず実感したのは土地の広さだった。東北6県は約67,000km²。これは四国3.6個分であり、岩手県は香川県の8倍の面積である。

そんな東北の美術館を訪れると、それぞれの美術館“ならでは”の鑑賞体験を得ることが多い。本稿ではそのいくつかを紹介する。東北に限ったことではないかもしれないが、首都圏では難しい展示が、この土地では可能な場合がある。広い土地、人が過剰にいない環境が、豊かな鑑賞と創造に寄与しているように思う。

最近観た中では、国際芸術センター青森 (ACAC) の「エナジー・イン・ルーラル」第2期(8月11日～9月24日)で展示されていた大和田俊《わたしは器官が好き》に驚かされた。大和田は青森市内の採掘場跡地から採取した石灰岩を使い、炭酸水を生産。展示室に置かれた冷蔵庫には炭酸水入りの瓶があり、来場者はそれをひとつ飲み、喉で鳴る太古の気体を感じる。炭酸水はACAC内で生産されていたらしい。これは、この立地と規模、運営だからこそ実現できた素晴らしい作品だった。また、弘前れんが倉庫美術館の「大巻伸嗣—地平線のゆくえ」展(4月15日～10月9日)では、青森県内のリサーチをもとに、紡がれていく生と死を表現した大規模インスタレーションが広がっていた。この作品は暗闇から始まるが、案内スタッフか

ていねいに足元を照らし、順路を示してくれた。些細なことかもしれないが、このスタッフの存在、また、大和田の作品同様に適度な来場者数が、展示を成立させていると感じた。

石神の丘美術館の「三沢厚彦 ANIMALS in ISHIGAMI no OKA」展(9月23日～11月26日)も楽しかった。道の駅の隣にあるこの美術館は、野外エリア〈花とアートの森〉をもち、彫刻作品を展示している。野外へ出るゲートには、貸出用の熊除け鈴とUVカット傘が置かれている。もちろん実用的なものだが、鈴を鳴らしながら、熊ではなく三沢の《シロクマ》に出会う流れは完璧だった。筆者が訪れた10月半ばは、秋の陽気に恵まれ、作品と揺れる花々やトンボとの共演が印象深かった。

青森県立美術館では、青森県出身アーティストの大規模個展が開催された。「生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」(7月29日～9月24日)と「奈良美智: The Beginning Place ここから」展(10月14日～2月25日)である。どちらも郷里の存在にスポットライトを当てている。後者は、青森県立美術館だからこそ成立する展示であり、巡回の予定はない。

東北の土地や文化は、アーティストの創造力を刺激するようで、前述した「エナジー・イン・ルーラル」や「大巻伸嗣—地平線のゆくえ」展のように、アーティストが現地の入念なリサーチや長期滞在を通して制作する例は多い。ACACはアーティスト・イン・レジデンスを主軸に運営されており、また、

青森県立美術館のプロジェクト「美術館堆肥化計画」(9月23日～11月3日)では、青森県内(2023年度は下北半島)にアーティストが滞在し、制作や展示、ワークショップを行っている。県立美術館として、青森市外の広い地域にも目を向けた企画である。

八戸市美術館では「美しいHUG!」(4月29日～8月28日)を開催した。この企画は、展覧会とプロジェクトを合わせた構成であり、森司がゲストキュレーターを務めた。当館の全学芸員6名とアーティスト6名が参加。アーティストはそれぞれ八戸市でリサーチをしたり、小中学生や高校生の協力を得たり、公募で集まったスタッフとプロジェクトを運営したりと、土地の人や文化と触れながら、のびのびと制作していた。中でも、タノタイガの作品《タノニマス》は、来場者がお面に装飾をしていくことで変化する参加型の作品だが、その運営は

公募スタッフの「タノニマス」プロジェクトメンバーが行った。来場者を急かすことなく、作品の意図を説明しながら落ち着いて運営できていた。

プロジェクトメンバーに限らず、当館ではフレンドリーな運営を心がけている。案内員(他館でいうところの監視員)は、積極的に来場者に声をかけて案内している。この案内を始めたところ、来場者の満足度が高くなった。また、当館には「展示室では静かに」というルールはない。作品について話すことを歓迎しているためだが、そもそも、展示室の私語に関するクレームがないのである。こうした運営は、すべての美術館でできるものではないだろう。だからこそ、それを大切にしたい。

以上、各美術館ならではの制作・展示・運営、それがもたらす鑑賞体験について紹介した。各館が東北という場所と館の特徴を強みにして、活動を行っていることが伝われば幸いである。



青森公立大学 国際芸術センター青森 (ACAC) 「エナジー・イン・ルーラル」大和田俊《わたしは器官が好き》撮影：後藤圭孝
写真提供：青森公立大学 国際芸術センター青森



挑戦する公立美術館コレクション展

—「夢と自然の探求者たち—19世紀幻想版画、シュルレアリスム、現代日本の作家まで」展と「浅川コレクション」

篠原誠司（しのはら せいじ・足利市立美術館）

地方で公立美術館が連携し、自館のコレクションに近隣館から借用したコレクションを加えて展覧会を企画することは、作品の調査や輸送にかかる経費の削減や連携強化が期待される点からも、近年、より多く目にするようになった。それが効果的に生かされた展覧会として、2023年4月22日から6月25日、群馬県立館林美術館で開催された「夢と自然の探求者たち—19世紀幻想版画、シュルレアリスム、現代日本の作家まで」展を取り上げたい。

この展覧会は、古来より創作されてきた、夢や幻想、自然の力からインスピレーションを得た芸術を、「理性の彼方にある人間の無意識や直感と関わる」ものと定義し、近・現代の美術の中にその軌跡を見ることを趣旨に、自館や群馬県立近代美術館のコレクション及び寄託作品を主に企画がなされた。展示の前半部は、夢、幻想をかたちとしたものや、シュルレアリスムを中心に無意識の領域から生まれた芸術が、海外の作品や資料で構成されていた。後半部では、無意識下のものがさらに自由で力強い表現へと姿を変えていく、戦後から現在までの美術が、主に国内作品によって展覧された。こうした展示の中で、開催自館のコレクションを補ってそれぞれの要所に置かれたのが、足利市立美術館が所蔵する「浅川コレクション」の中から貸し出された、海外作家8名11点、国内作家5名7点の作品である。

「浅川コレクション」は1950年代から半世紀以

上の間、画商として近・現代美術の展覧会企画及び売買に携わった浅川邦夫氏（1932-）から、縁があり足利市立美術館が寄贈を受けた900点あまりの作品によるものである。浅川氏は、戦後間もなく画家を志して福井から上京するが、日本における現代美術画廊の草分けである東京画廊の設立を手伝った志水楠男が、1956年に独立して南画廊を興す際、画業の師であった鳥海青児の薦めで創業に携わるようになった。それから12年の間に、中西夏之、菊畑茂久馬、三木富雄、今井俊満をはじめとして、日本の戦後を代表する作家の展覧会を数多く企画した後、自身の画廊春秋を設立し、35年間にわたって画廊経営を行った。南画廊時代から始まる50年におよぶ画商人生を通じて、独自の審美眼をもとに作品蒐集を続けた中で形成されたのが「浅川コレクション」である。

会期中、展覧会を担当した松下和美学芸員の案内を受けながら、92歳を迎えて今も壮健な浅川氏と会場を巡る機会を得た。まずは、幻想絵画に分類されるオディロン・ルドン、オスカー・ココシュカなどの作品を経て、シュルレアリスムの提唱者であるアンドレ・ブルトンの著書や、マックス・エルンストのブロンズ彫刻が並ぶコーナーを歩く。さらに「ジョルジュ・パタイユの眼」という興味深い章題が付された場に足を進めると、ヨーロッパにおけるアール・ブリュットを代表する一人であるフリードリヒ・シュレーダー＝ゾンネンシュターンの作品が、その才能をジャン・デビュッフェ

と共に見出したとされるハンス・ベルメールの作品と並び、サルバドール・ダリ作品へと続く、「浅川コレクション」が核となったエリアにいたる。展示はさらに、シュルレアリスムのさらなる広がりをテーマに、ロベルト・マッタ、ジョアン・ミロ、ピエール・アレシンスキーなどの作品が、マックス・エルンスト、ジャン・ティンゲリー、アルヌルフ・ライナー、カレル・アペルらの「浅川コレクション」作品と並ぶコーナーへ展開していく。

ここから先は、群馬出身の福沢一郎及び鶴岡政男の作品に続いて、勅使河原蒼風のダイナミックな立体造形が岡本太郎作品と絡み合う展示から始まる、日本の戦後美術を主にした後半部に入っていく。このエリアでは、浅川氏が1950年代末からその最晩年の1970年代末まで深い交流を続けたという、日本にシュルレアリスムを根付かせた功績者である瀧口修造の作品と、瀧口と深い関わりを持つ福島秀子、池田龍雄、加納光於などの「浅川コレクション」作品のほか、同じく「浅川コレクション」の桜井孝身、群馬県立近代美術館所蔵の今井俊満らの抽象表現による作品が並び、さらに

進むと、深沢幸雄による版画群を経て、写真、絵画など9名の現代作家による展示へと続いていく。

浅川氏との会場巡りは1時間半ほどにおよんだが、それは、戦後美術史を彩った様々な作家の人となりや作品制作のエピソードを、実作品を前にして生の声で聞く貴重な時間となった。

この展覧会では、人の意識の深層に蓄えられたイマジネーションが、芸術家の手で作品として表されるとき、際限なく豊かなかたちを持ち得るというメッセージを受け取ることができたといえる。展示の中では、作品同士の関連が明確な部分と不明瞭な部分の混在もあったが、全体では、様々なピースが組み合わさって一つの調和が生まれていることが読み取れた。とりわけ後半部では、日本におけるシュルレアリスムの受容と、そこから抽象を経て多様な表現へ向かう展開を実作品から辿る体験に、一種の高揚感を覚えた。こうした有意義な展覧会を、自館や関連館の所蔵作品と、近隣に位置する足利市立美術館のコレクションで構成し得たことに、公立美術館コレクション展が新たに挑戦する姿を見て取ることができたのである。



左から「アール・ブリュット」の提唱者でもあるジャン・デビュッフェの作品（群馬県立館林美術館蔵）に続き、いずれも「浅川コレクション」（足利市立美術館蔵）のフリードリヒ・シュレーダー＝ゾンネンシュターンの作品2点、ハンス・ベルメール作品2点が並ぶ。



左から今井俊満作品（群馬県立近代美術館蔵）、いずれも「浅川コレクション」（足利市立美術館蔵）の桜井孝身作品、池田龍雄作品2点、福島秀子作品、瀧口修造のデカルコマニー作品が並び、奥には鶴岡政男作品が覗き見える。

新しい傾向、試みと継続すべきこと

音 ゆみ子(おと ゆみこ・府中市美術館)



当館では、毎年夏に博物館実習を行っている。大学で希望者1名を選抜してもらい、15名ほど受け入れているので、様々な大学から美術史や制作を学ぶ学生が集まる。カリキュラムは講義が中心で、著者はここ10年ほど「企画展」という授業を受け持ち、話の導入に「最近、心に残った展覧会は？」という質問をしている。以前は、上野や六本木の大型展を挙げる学生が圧倒的に多かったが、近年、アニメの原画展、ファッションやイラストの展覧会が増えてきた。そして、ついに昨年、ほとんどの生徒がそうした展覧会を挙げ、いわゆるファインアートの展覧会を挙げたのは1人だった。この回答に、自分が思い描く「展覧会」の幅が狭いことを反省した。以前からファインアート以外の展覧会の人気は高かったことを思えば、これまでは授業の中では、アニメの原画展などを発表するべきではないと考えた生徒も多かったのだろう。しかし、昨年の学生たちの話ぶりには、ファインアートとそれ以外の区別が全く感じられなかった。

恥ずかしながら、学生たちが挙げた展覧会は開催すら知らなかったものが多く、著者も拝見したのは、東京都現代美術館の「クリスチャン・ディオール、夢のクチュリエ」展(2022年12月21日～5月28日)だけだった。他館のベテラン学芸員の方に強く勧められ訪れたが、展示演出の多彩さに圧倒された。プロジェクトマッピングや鏡を多用した空間は、いわゆる「映える」空間だが、会場でしか味わえない高揚感も抜群だった。印象的だっ

たのは、東京都現代美術館の所蔵品がディオールのドレスを引き立てる背景のように飾られていたことだ。ドレスと絵画がフラットな価値観の上に展示されていたことが、実習生の感覚とも繋がって感じられた。

ファインアートを扱う展覧会も盛況だった。国立新美術館の「ルーヴル美術館展 愛を描く」(3月1日～6月12日)、「テート美術館展 光―ターナー、印象派から現代へ」(7月12日～10月2日)は、それぞれ「愛」と「光」をテーマに掲げ、ストーリー性を強く打ち出していた。「愛」と「光」という古典的なテーマでありながら、切り口に新鮮さを感じさせることで、また、「ルーヴル美術館展」はポップな広告ヴィジュアルで、「テート美術館展」はリヒターやエリクソンといった人気作家も加えることで、若い客層の獲得にも成功しているように見えた。

国立新美術館の二つの展覧会からは、有名美術館の名前だけで集客できる時代ではないという切実さも感じられたが、裏を返せば、世界的美術館のコレクション展が当たり前になるほど数多く行われてきたということだ。当然、美術ファンの知識も深まっているだろう。そんな日本人の西洋美術への関心の成熟度を感じたのが、国立西洋美術館の「憧憬の地 ブルターニューモネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」展(3月18日～6月11日)とSOMPO美術館の「ブルターニュの光と風―画家たちを魅了したフランス〈辺境の地〉」展(3月25日～6月11日)、そしてDIC川村記念美術館「芸術

家たちの南仏」展(3月11日～6月18日)である。美術史上、重要な場所とはいえ、フランスの地方に注目した展覧会が同時期に3つも開催されるのは、日本くらいかもしれない。会期が重なったのは偶然だと聞かすが、世界的に見ても展覧会の数が多い東京とその近郊ならではのことだろう。

当館の例で恐縮だが、府中市美術館では「インド細密画」展(9月16日～11月26日)を開催した。「美術における東西」を活動の柱とし、西洋と日本の美術を比較する展覧会を行ううちに「比較の対象は西洋だけでよいのか？」と考え始めたからだ。視点を広げるためにインド細密画を取り上げたが、予想を大きく上回る集客があり驚いた。非西洋圏の美術に関心が向くようになったのも、ある意味では、日本人が西洋美術を十分に味わってきたからだとと言えるかもしれない。

最後に、夏の子ども向けイベントについて書き加えたい。10年ほど前、夏休みの子ども向け展覧会が、都内の美術館で盛んに行われた。デジタル技術も駆使した大規模展が相次ぎ、話題になったが、

近年は一時より少なくなった印象だ。その代わりに「キッズデー」などを設け、一般向けの企画展や常設展を日時限定でファミリー向けに開放するイベント型の事業が盛んだ。普及事業と並行して通常の展覧会を行えるメリットは大きく、子どものみを対象とした展覧会より主催者に好まれるのだろう。

当館では、子ども向け展覧会が今ほど一般的ではなかった2006年夏に、「ばれたん」というキャラクターを案内役にした展覧会を初めて行った。予算も少なく手作りの展覧会だったが、鑑賞や簡単な工作を楽しむ内容が好評で恒例となり、現在では隔年で夏のばれたん展、それ以外の年も夏休みには子ども向けの展覧会を開催している。実は、昨年、博物館実習に参加した学生のうちの2人が、「ばれたん展がきっかけで、学芸員を目指した」と目を輝かせて話してくれた。その言葉に胸が熱くなったが、子ども向けの展覧会や事業など、成果が表れるまで時間のかかるものこそ、継続が大事だと感じた。近い将来、「ばれたん育ち」の学芸員が誕生することを願っている。



東京都現代美術館「クリスチャン・ディオール、夢のクチュリエ」展 会場風景



府中市美術館「ばれたんサマー わら田もいっしょ!」展 会場風景

北信越ブロックにおける 地域密着型の企画展について

児矢野あゆみ（こやの あゆみ・新潟市美術館）



美術館を巡る楽しみの一つとして、「地のもの」との出会いがある。その地域に根ざした作品を収蔵し、地元との交流によって育まれてきた美術館の歴史を知り、作品たちが収蔵された経緯を想像すると味わい深い。企画会社の発案による巡回展もさることながら、所蔵品の調査研究を進め、その発表の場として展覧会を開催する動きも活発である。本報告では、北信越における所蔵品の活用、美術館同士及び地域との連携について、この度みだ限りで紹介したい。

新潟市巻郷土資料館では、「巻の古布展一野良着・ボロ・緋の美」（4月29日～5月28日）が開催された。新潟市（旧巻町）で代々続く造り酒屋の生まれであり、シュルレアリストともいえる美術家、上原木呂氏による企画である。小さな展示室には、上原家で代々使われてきた古布と、郷土資料館の収蔵品とがざわめき合い、濃厚な生活の匂いが充満する。おしめ、酒袋、雑巾、緋端切れ…。本展の最後を飾るのは、幕末から昭和初期の古布を繋ぎあわせて制作された上原氏による《檻褌（ボロ）による抽象作品》である。ここでは全長50mの大作の一部が展示された。

鉛筆画の巨匠である木下晋は、新潟とのゆかりが深い作家である。胎内市美術館で開催された「木下晋展～神々しく美しいもの～」（4月15日～7月2日）では、初期の油彩画から、君子夫人を描いた最新作までを年代順に辿る構成であった。冬は雪に埋もれてしまう胎内は、贅女の小林ハルが

最後に身を寄せた地であり、彼女の肖像画を描くために木下氏が足繁く通った地である。ハルさんが最晩年を過ごした施設は、美術館から車で10分ほど山奥へ進んだところだ。この地で鉛筆画と対峙することで、その線描の持つ重みをあらためて実感する。

新潟県立近代美術館では、新潟出身の作家を主題とした展覧会が連続して開催された。「望郷の画家 橋本龍美展―神も、庶民も、バケモノも」（4月15日～6月4日）、「ベルギーと日本―光をえがき、命をかたどる」展（9月16日～11月12日）である。前者は、新潟県加茂市出身の橋本龍美の没後初めてとなる大規模な回顧展だ。新制作協会への出品作品をはじめ、故郷の自然や民俗から着想を得た作品の数々が展示された。後者は、ベルギーへの留学経験のある、画家の太田喜二郎と児島虎次郎、そして新潟出身の彫刻家、武石弘三郎にスポットを当てたものである。新潟県立近代美術館の所蔵する武石弘三郎の作品に加え、新潟大学が所蔵する太田喜二郎による《赤い日傘》が出品された。また、美術館のエントランスには、ロダンによる《カリアティードとアトランド》（1876年）が常設されている。「ブリュッセルで見られるロダンの最も美しい作品」と評された作品であり、本展を通じて改めて注目する機会となっていたように思う。

高岡市美術館では、「ヘテロジニアスな世界 光瑠×牛人」展（9月16日～10月22日）が開催された。石崎光瑠ゆかりの南砺市立福光美術館、

篁牛人ゆかりの富山市篁牛人記念美術館と、近年それぞれの回顧展を企画した富山県水墨美術館による協力で実現したものだ。活動時期が違う作家同士の展示なので、その交流や繋がりを紹介するものではない。色彩豊かな光瑠と、ユーモラスな水墨画を描いた牛人の個性が展示室内に対置される。各作家の回顧展をきっかけに企画された本展は、3つの章で構成され、その相反する表現を年代順に並べた素直な展示であった。

長野県の辰野美術館において、「長野県立美術館交流名品展 日本の真ん中で美がひらく」（10月7日～11月26日）が開かれた。長野県立美術館では、「県内各地域の美術館と共に、双方のコレクションを活用し、協働で企画・立案・実施する展覧会」が試みられている。その地域の魅力を再発見すると同時に、各館学芸員の連携を強めることが目的だ。本展では、章立てはなく、作品は

素材・技法によって大まかに分類され、そのなかでテーマが設定されていた。1階の展示室は、版画、工芸、油絵が並ぶ。版画・油絵では、諏訪・南信そして木曽地域の風景や風俗が表された作品が中心となる。新潟県生まれの中村琢二による《伊那谷の春》が展示されていて、私が勤務する新潟市美術館の所蔵作家と思いがけぬ出会いを果たした。2階の展示室には、彫刻、日本画に加え、辰野町出身の中川紀元による大作が並ぶ。展覧会に足を運んだ辰野町の人々は、長野県立美術館のコレクションを通して、地元の持つ魅力を強く感じ取る機会となったのではないだろうか。

美術史という大きな流れのなかで作家や作品の価値を問うことも重要であるが、その地域だからこそ展覧すべきものがある。適切かどうかかわからないが、「地のもの」を味わい尽くす地産地消は、美術でも通用するのかもしれない。



新潟市巻郷土資料館「巻の古布展一野良着・ボロ・緋の美」展会場風景 写真：伊藤隆英



上原木呂《檻褌（ボロ）による抽象作品》（2016年、50mの大作の一部）写真：伊藤隆英

地域美術の発信

和歌由花（わか ゆか・美濃加茂市民ミュージアム）



2023 年春から秋の間、東海ブロックでは近現代の地域美術に関する歴史と現況、継続的な取り組みの成果を感じられる展覧会が多く開かれた。本稿ではテーマの設定上、全国美術館会議の加盟館ではないが地域の作家紹介を継続して行う美術館や、地域の美術研究に努める博物館を含めて紹介したい。

岐阜県では地域ゆかりのベテラン作家の世界観を存分に味わえる展覧会が相次いだ。飛騨市出身の船坂芳助の版画展「My Space and My Dimension 〜ポップな色彩 反復する形 広がる色面〜」展（飛騨市美術館、7 月 1 日〜8 月 20 日）、同館での船坂の版画展は 2 回目であるが、作家の遊び心を彷彿とさせるランダムな展示手法で見せた最新作は圧巻であった。土岐市に工房を構える三島喜美代の作品を収蔵する岐阜県現代陶芸美術館での「三島喜美代一遊ぶ 見つめる 創りだす」展（9 月 16 日〜11 月 26 日）は初期の絵画に始まり、消費社会を見据えたゴミを題材にした作品が空間を凌駕するエネルギーな展示であった。関市篠田桃紅美術空間では岐阜の美術界をけん引した三輪乙彦の彫刻と、三輪祐子の絵画による「想一見上げる先に耳を澄ます」展（9 月 23 日〜12 月 24 日）が開かれた。同館での二人展はこれが 3 回目であるが、2021 年に亡くなった三輪乙彦の最後の作と三輪祐子の新作は、静謐な祈りを想起させた。岐阜県美術館では、収蔵品の安藤基金コレクションから岐阜出身で東京藝術大学教授の林武史

の石彫《石間》を展覧（10 月 11 日〜12 月 24 日）、山河を思わせる荘厳な空間が創出された。

地域美術の研究に注力してきた館の成果が表れるのは、やはり収蔵品展である。先の林の展示と同時期、岐阜県美術館で催された「さかのぼり岐阜洋画史 大正・明治編」展（10 月 11 日〜12 月 24 日）には山本芳翠や熊谷守一など県出身の画家の傑作が揃い、岐阜の美術史を編み続けてきた館の歴史を物語っていた。愛知県の瀬戸市美術館は瀬戸に暮らした北川民次の展示を幾度も開催してきた。現在までの収蔵品を一堂に展覧した「瀬戸市美術館収蔵 北川民次コレクション全員集合！」展（6 月 3 日〜7 月 30 日）には多くの寄贈品も含まれ、作家に寄せる市民の思いが感じられた。

地域の美術史を編むのは美術館だけではない。地域の博物館やミュージアムで行われる美術品の展示も見逃せない。土岐市美濃陶磁歴史館の「開館 44 年 収集の軌跡Ⅱ 現代の作り手たち」展（9 月 9 日〜12 月 10 日）では美濃焼と共に、芸術文化の振興に尽力した初代市長の収集美術品、陶磁器の産地としての文化振興の状況や今も当地で活動する陶芸家の作品が紹介され、美術に関わる歴史と文化が今に続いている事実を伝えていた。また、多治見市美濃焼ミュージアムでの「没後 100 年 成瀬誠志とその周辺」展（9 月 2 日〜1 月 28 日）では岐阜県中津川市出身の陶工が上京後に取り組んだ薩摩焼風の絵付の作品を多数紹介、展示の実現に至った経緯と思いを綴る印象的な文章が掲げら

れていた。ここでシカゴ万国博覧会への出品作を見た筆者は、岐阜県現代陶芸美術館で 3 月 4 日に行われた「超絶技巧、未来へ！明治工芸とその DNA」展（2 月 11 日〜4 月 9 日）の関連企画「語りの会 樋口一葉 うもれ木」を思い出した。「うもれ木」は作者の一葉が、成瀬に師事した兄を通じて知った明治時代の陶工を主人公に描いた小説で、美術と文学を地域の視点から結び付けた意義深い語りの会であった。

美術の展示に歴史、産業、文学など、地域に息づく様々な文化的な要素を結び付けられれば、展示テーマにも多様性が生まれる。愛知県美術館での「幻の愛知県博物館」展（6 月 30 日〜8 月 27 日）は美術の領域を超えた幅広い視点から地域の歴史にアプローチした企画展で、博物学的な「こと」の捉え方と美術の伝え方が共存していた。筆者が勤務する美濃加茂市民ミュージアムでも美術館と博物館の手法を混交させる展示を試みている。今秋は、当市出身で早稲田大学に学んだ歴史学者の津田左右吉が愛した美術・音楽・演劇を紹介する早

稲田大学との共催展「津田左右吉と藝術」展（9 月 16 日〜10 月 22 日）を開催。津田が観た明治・大正の芸術の動向として、日本近代美術史、西洋音楽の受容史、演劇改良運動史にも触れた。また文学館や歴史館の展示手法を意識して、津田が芸術について書いた言葉の展示にも力を入れた。最後の津田愛蔵の作品展示では、美術の空間性を考えて配置した。

地域ミュージアムとして美術を展示する時、作品鑑賞のための空間作りを第一に据えつつ、地域に育まれてきた歴史、産業、文学など広い視野を以て構成を検討すれば、その地域のその館でしか成し得ない特別な文脈を創出できる。美術は観察や思索や創作の営みの結果であるため、同じ営為を礎にして成り立つミュージアムの学問分野の全てに親和性がある。美術館と博物館、規模の大きさを問わず、分野を超えた多様な視点を持ち、地域の文化を考え併せていけば、深みと広がりのある地域の美術史を発信することができるのではないだろうか。



岐阜県現代陶芸美術館「三島喜美代一遊ぶ 見つめる 創りだす」展 会場風景
壁面・床（リーフレット、新聞）：（Copy'78-'80）1978-80 年 滋賀県立陶芸の森陶芸館蔵
床：（リーフレット）2007-08 年、《バナナボックス》2007 年、《ニュースペーパー》2007 年、《ニュースペーパー '06》2007 年、《Comic-07》1979-2007 年 いずれも岐阜県現代陶芸美術館蔵 撮影：宮川邦雄



美濃加茂市民ミュージアム「生誕 150 年 津田左右吉と藝術 心を寄せた美術・音楽・演劇の世界」展 会場風景

コレクションを見せる

知野季里穂（ちの きりは・田辺市立美術館）



田辺市立美術館の分館である熊野古道なかへち美術館では、2023 年度に入ってから外国人旅行者の来館者数が増えた。コロナ禍以前に戻ってきたのだなと思っていたが、先日数字で比較してみたところコロナ禍以前よりも多くなっていることが分かった。課題となっているのは、展覧会の外国語対応である。翻訳費を確保できれば問題はないのだが、諸々の物価や光熱水費の上昇によって通常の予算も圧迫されている中で、新たな経費を割くことは難しく、今後どうしていくのが良いか悩むことの一つである。とはいえ、人の動きが活発になってきたのは嬉しいことで、外国語対応に限らず、あらゆる人に開かれた美術館であるように努力してゆきたい。

さて、近畿ブロックの 2023 年度の上半期に開催された展覧会について、コレクションの見せ方に注目して拝見したものを主に記しておきたい。はじめに高島屋史料館で開催された「FROM OSAKA ～百貨店美術部モノガタリ～」展。第 1 部「美術展を観る」（3 月 4 日～5 月 8 日）、第 2 部「美術品を購う」（5 月 20 日～7 月 3 日）の 2 部構成で、大阪の地からはじまった百貨店美術部の歴史を紐解く同館ならではの企画であった。第 2 部は見逃してしまったが、第 1 部で展示されていた、かつて天王寺駅のコンコースに掛けられていた大型のタピスリー《熊野詣》の鍋井克之による原画や、高島屋で開催された「具体美術展」の案内状など、時代を映したコレクションがおもしろく、百貨店が

日本の近代美術史の中で果たした役割の重要性を改めて感じるものであった。

京都国立近代美術館では、戦後間もなくに京都の地からはじまった前衛陶芸集団、走泥社の回顧展「走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」展（7 月 19 日～9 月 24 日）が開催されていた。前半期 25 年間の活動に限定するものの、全貌を俯瞰する初めての展覧会ということで話題となった。綿密な調査・研究による内容の濃い展覧会で、前衛との意識の下で制作された多種多様な表現が一堂に並ぶ様にも圧倒された。開館 60 周年記念として開催されるのにふさわしい展覧会であった。

同じく周年の記念展として開催された展覧会で、2022 年にオープンした大阪中之島美術館の開館 1 周年記念展「佐伯祐三―自画像としての風景」（4 月 15 日～6 月 25 日）も挙げておきたい。佐伯祐三の代表作が勢揃いした見応えのある展覧会で、その中でも画業のエポックとなる位置に同館のコレクションがあったのはやはり注目されよう。またパリの風景だけでなく、下落合（東京）や滞船（大阪）といった日本の風景を描いた作品群に焦点が当てられて一つの章が構成されていたことは、これまでの研究の成果を遺憾なく示すものであった。

大阪中之島美術館の佐伯祐三作品と言えば、同館設立の起点である山本發次郎コレクションだが、その山本が支援した画家の一人に、和歌山県田辺市出身の洋画家、原勝四郎がいる。生命感をたたえた作品によって忘れ難い存在となっている原の

画業を回顧する「原勝四郎展 南海の光を描く」（10 月 7 日～12 月 3 日）を和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館の共同で開催した。原は後半生を郷里から出ることなく過ごしたこともあり、全国的な知名度が高いとは言えないが、両館ともに重要な画家の一人として調査・研究を重ねてきた。同じ和歌山県内の北と南に離れた場所にある 2 館での同時開催であり、和歌山県立近代美術館では生涯を辿る内容、田辺市立美術館では原の生活した地域との関係に注目する内容とし、相互に作用することを図った。

興味深い試みの企画に滋賀県立美術館の「“みかた”の多い美術館展 さわる知る 読む聞くあそぶ はなしあう「うーん」と悩む 自分でつくる!」（10 月 7 日～11 月 19 日）があった。小さな子どものいる家族や障がいのある方など、普段美術館との距離がある人たちと相談して企画されたという展覧会で、触れたり作ったりといったいつもとは違う 8 つの鑑賞方法が提案されていた。会話の提案からはじまる会場のあちらこちらから、楽し

そうな声が聞こえてきたことが印象深い。なかなか美術館に行かない（行けない、行きにくい）層へアプローチされていただけでなく、普段から美術館に来ている層にとっても新鮮なコレクションの見せ方になっていたのが良かった。

兵庫県立美術館の企画シリーズ「美術の中のかたち―手で見る造形」も充実した内容であった。視覚偏重の美術作品やその鑑賞を考え直すことを目的に 1989 年からはじまったこの企画は今回で 33 回目とのことで、手で触れる鑑賞法を早くから開拓し、継続してきた同館の取り組みには頭が下がる思いだ。今回は「遠藤薫 | 目と球」（9 月 9 日～12 月 24 日）が開催されていた。染織素材を主にする遠藤の作品は、触れる鑑賞との相性が良いように思われ、また、触れるだけではなく、かすかな匂いやインタビューの声など、複合的な要素によって、遠藤が今回のテーマとしていた「生まれていく」過程を、身体に染み込むように感じることができたことは、他にない鑑賞体験であった。



和歌山県立近代美術館「原勝四郎展 南海の光を描く」会場風景

身近な存在であるために —瀬戸内の新たな美術館

大山真季（おおやま まき・東広島市立美術館）



2023 年春、中国地方は新規開館あるいはリニューアルオープンした美術館がいくつかある。ここでは該当する 3 館について紹介したい。筆者が所属する東広島市立美術館も、建物の老朽化などを理由として開館から 40 年以上が経った 2020 年に市内中心部へ新築移転オープンした美術館である。中国地方はこの近年、生まれ変わる、あるいは新たな美術館が続々登場しているエリアだ。

2023 年 3 月 1 日、広島県大竹市の瀬戸内海が眼前に広がる海辺エリアに下瀬美術館が誕生した。美術館周辺は大きな公園や商業施設があり、ファミリー層がしばしば訪れる場所である。収蔵品は丸井産業株式会社の創業家が収集した人形や近代絵画のほかエミール・ガレなど西洋工芸を中心としたコレクションで形成されている。ミラーガラスによって周囲の風景に溶け込むような建築は坂茂によって手掛けられたもので、サイン・ロゴは原研哉によるデザインである。敷地内に美術館と計 10 棟のヴィラが併設されていることが特徴で、ヴィラには、新築のほか坂が過去に手掛けた別荘を宿泊施設として再設計した建物が含まれる。つまりは瀬戸内のランドスケープと建築、美術が一体となって楽しめる場所であり、展覧会以外の要素でも下瀬美術館を訪れてみたいという好奇心をそそる。実際、筆者が訪れた時は家族連れや建築に関心を向けている来館者を多く見かけた。企画展示室から可動式展示室（水の浮力によって建物丸ごとの移動と配置の組み換えができる機構を備

えている）へ移動する導線から、少し寄り道をする位置にガレ作品のモチーフである草花を中心に植栽した「エミール・ガレの庭」があり、作品鑑賞の合間に内部空間から外部空間へ出て四季折々の草花や海の景色を一望することができるつくりとなっている。

下瀬美術館開館とほぼ同時期となる、3 月 18 日には約 2 年 3 ケ月の改修工事休館を経て広島市現代美術館がリニューアルオープンした。これまでの経年劣化を補う「機能回復」と 1989 年開館当時から現代までの社会変化を受け、いまの時代に求められる美術館としての機能を追加した「機能拡張」を行ったようだ。来館者視点で大きく変わったところといえば、多目的スペース「モカモカ」が 1 階に増設されたことだろう。改修工事の長期休館に入る以前は、共用部であるロビー空間でワークショップを開催している場面に幾度か出くわし、参加者が楽しそうに取り組む様子をほぼえましく横目に見ながら展示室に向かったものだ。現在「モカモカ」では休館中に館外活動として活用されていたツールボックス（2m26 による制作）を用いて毎週日曜ワークショップが行われているという。自由参加で気軽に体験でき定期的に開催されるというのは、人々が美術館を訪れる習慣に繋がりがやすい取り組みである。また、増設空間にカフェが移動し、元カフェスペースだった場所はショップへと変貌していた。その他、公衆電話スペースなど、ある時代までは活用していたが、現代においては機能を

失った場所を展示活用するなど、一部では元の建築を再活用している。それによって大きな修繕をせずとも、元来の意匠を引き継ぎながら新しい姿をみせることが可能となる事例を提示してくれている。当館を含めどの美術館でも、時代とともに役割を終えたものの行き場をどうするかという問題に、いずれ直面する時が待ち受けているのではないだろうか。

そして岡山県西南部にある井原市立平櫛田中美術館は 2020 年から建て替えが進められ、4 月 18 日にリニューアルオープンした。ロビーなどの内装には木が使用され、田中作品に相応しく温かみのある空間に仕上げられている。企画展等を行う展示室とは別に平櫛田中記念室が新たに設けられ、まずは年譜からはじまる。そこには図やテキストでの紹介に加えて映像コーナーがあり、田中の生涯、代表作《鏡獅子》の制作物語、そして年譜や作品解説でたびたび登場する技法「星取り法」をわかりやすく伝える 3 本の映像を観ることができる。展示されている年譜の概要を映像にまとめることで、文

章を読むことが難しい子どもにも情報を届けられ、かつ文章や静止画では伝えることが難しい技法を映像で紹介することにより、深く作品を理解することができる。一方で、東京のアトリエを再現したコーナーでは、田中が作品に使用していた木材である桜・楠・檜の解説と香りを体験できるボックスが展示されている。様々なツールを用いることで、幅広い層に平櫛田中という郷土ゆかりの作家の足跡と魅力を伝える工夫がなされていた。

いまの時代の美術館は作品鑑賞に留まらない、多様な役割をもつ場で日常に寄り添う存在であることが求められているように思う。“日常”には人々の暮らし以外に、地域との密接な関係性も含まれる。その土地の風景に美術館が溶け込むこと、時代にあわせ変化しながら人々に習慣となる機会を提供すること、郷土ゆかりの美術について誰もが親しむことができる場所であること。3 館の開館及びリニューアルを拝見して感じたこれらのことは、美術館が地域に浸透し、身近な存在となるためのヒントになり得るだろう。



周囲の風景が映りこむ下瀬美術館の外観 ©SIMOSE



井原市立平櫛田中美術館「上野桜木アトリエ」コーナーにある木材の香り展示

上半期の四国の美術館活動 —「四国美術館会議」と現代作家の個展

柳澤宏美 (やなぎさわ ひろみ・高知県立美術館)



2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したこともあって、昨年の春からは人の流れも活発になった。高知は牧野富太郎をモデルにしたNHKの連続テレビ小説「らんまん」の効果もあり、ゴールデンウィークや夏休みは、コロナ禍以降としては最高の人出だったように思う。

活動が活発になったのは四国内の美術館も同じで、大きなこととしては、2020年から行われていなかった「四国美術館会議」の対面での総会開催が挙げられる。四国美術館会議はその名のとおり四国内の美術館で構成される組織で、「四国美術館協議会」として始まり、1993年に「四国県立美術館会議」、1998年に「四国美術館会議」となった。具体的な記録があるのは1990年からで、名前のとおり当初は県立館のみの組織だったが、四国内の館の集まりへと変化し、2000年には10館が加盟するようになった。現時点での加盟館は13館だが、加盟していなくても総会には参加可能で、とくに会場となる同県の館には積極的に参加を呼びかけている。愛媛県美術館を会場に開催された昨年の場合は、県内のミウラート・ヴィレージなど14館から参加があった。4つの県立館を回りながら会場にし、各館の事業報告や問題点の共有などを行っている。対面での総会は2019年3月に高知で行ったのを最後に開催していなかったが、コロナが落ち着いてきたこともあって、「防災」をテーマに昨年6月に4年ぶりに実施した。

徳島県立近代美術館からは、災害時に全国美術

館会議（以下、全美）と連携できるような体制づくりの提案があった。全美と四国美術館会議は別組織であるが、全美の「大災害時における対策等に関する要綱」で定められた四国広域ブロック本部館と四国美術館会議の幹事館がいずれも県立館となっているため、持ち回りである本部館と幹事館の交替サイクルを統一することでスムーズになることを目指していく。また、高知県立美術館からは南海トラフ地震を想定した館の防災訓練の様子を伝えた。その他、事例発表として丸亀市猪熊弦一郎現代美術館から美術館を含む文化施設の連携及びファンドレイジングについての報告、愛媛県美術館から2022年に開催された「みる冒険 ゆらぐ感覚」展についての報告が行われた。発表後の交流会では、各館の発表に刺激を受け、防災方法についての意識を新たにしたり、自館のアピールポイントを再検討したりと、活発な意見交換があった。

発表を聞くこともさることながら、やはり対面であいさつ、情報交換ができたのが大きかったと思う。隣県といえども行くには時間がかかる施設も多く、また世代交代が進む中でいつの間にか新しい学芸員が増えている館もあった。四国の学芸員や関係者が一堂に会せる場所は必要である。一方で、やはりコロナ禍で3年間開催できなかったのは痛手で、これまでの四国美術館会議の活動内容が館内で共有されていない館もあった。今までの積み重ねを確認し、今後どのような活動を行っていくかを検討しているところでもある。各館の自主事業、他

の会議への参加などがあるなかで負担にならないように、しかし各館の繋がりを保つ方法で発展することを目指したい。

四国の美術館における上半期は、愛媛県美術館で「大竹伸朗展」(5月3日～7月2日)、高松市美術館で「上田薫展」(7月15日～9月18日)、丸亀市猪熊弦一郎美術館で「中園孔二 ソウルメイト」展(6月17日～9月18日)、徳島県立近代美術館で「ディーン・ボーエン展 オーストラリアの大地と空とそこに生きる私たち」(9月16日～12月10日)、高知県立美術館で「野町和嘉写真展」(7月8日～9月24日)と、現代作家の大規模個展が多く開催された。「大竹伸朗展」は東京都と富山県も巡回地だったが、愛媛県は地元の宇和島を拠点に活動する作家の展覧会ということで、愛媛新聞とコラボレーションした連続告知や作家がゲリラ的に演奏を行うといったパフォーマンスが目玉になり、来場者数の増加に繋がったようである。展示室に収まりきらないエネルギーを感じると共に、道後温泉の工事現場を覆うテントの原画など地元ゆかりのものも展示してあった。高松の「上

田薫展」は作家が東京藝術大学在学中に制作したデッサンから昨年までの最新作までを網羅する内容で、初期の抽象画やグラフィックデザインの仕事、スーパーリアリズムの描画技法による卵、シャボン玉や水面といった反射するものを描いた作品、近年のスケッチ類などが展示されていた。作品数は多くなかったが、選りすぐった作品からは画家のエッセンスが感じられた。香川県にアトリエを構えたものの、25歳で生涯を閉じた作家の個展である丸亀の「中園孔二展」は、約200点の作品、スケッチブック、蔵書などが一堂に会し、圧巻の展示空間になっていた。オーストラリアの作家を紹介する徳島の「ディーン・ボーエン展」は、油彩、彫刻など多彩な作品が展示され、しっかり描き込まれた油彩画など、各技法をよく研究していると感じさせた。高知で開催された「野町和嘉写真展」は、雄大な自然や世界遺産にもなっている遺跡、シベリアの強制労働収容所などを被写体にした写真群が展示され、見る人にインパクトを与えていた。当館終了後、作家の出身地である三原村でも展覧会が行われた。



高知県立美術館「野町和嘉写真展」会場風景 撮影：中島健蔵



四国美術館会議会場風景(愛媛県美術館研修室、2023年6月)

地域につながり、ひらいていくこと

稲葉麻里子（いなば まりこ・鹿児島市立美術館）

2023 年度上半期を振り返ると、まずはここ数年間の、移動や接触をはじめとする様々な制約がようやく緩和されてきたことを実感する日々だった。鹿児島では、総文（全国高等学校総合文化祭）と国体、47 年に一度のイベントが同年開催され、いつも以上に賑やかな半年であった。当館も総文の会場となり、全国の高校生たちの作品が都道府県ごとに展示された。若い感性による新鮮な視点や原石のような美しさは勿論、各地の風土に根ざした主題の地域性にも目が留まった。

地域ゆかりの作家や作品は、地方の多くの館で収集方針の主要な柱であるし、展覧会においても地域とのつながりは、そこで開催する意義となる。九州ブロックでも、各館の所蔵品や地域性を生かした試みが多くなされていた。筆者が拝見した展覧会を中心に報告させて頂くが、例えば、長崎県美術館「浪漫の光芒―永見徳太郎と長崎の近代」展（10 月 14 日～1 月 8 日）は、長崎の文化人・永見徳太郎の全貌に迫る初の展覧会として、コレクター、文筆家、芸術家という多面的な人物像と地域文化への影響を網羅的に紹介する充実した内容であった。巡回展においても、熊本県立美術館「令和 5 年度国立美術館巡回展 20 世紀美術の冒険者たち―名作でたどる日本と西洋のアート」展（7 月 22 日～9 月 18 日）では、東京国立近代美術館の名品に開催館の所蔵品を交えることで、近代から現代に至る美術の展開を概観するという趣旨により豊かな厚みをもたらしていた。所蔵品展

では、宮崎県立美術館「第 3 期コレクション展」（9 月 16 日～12 月 17 日）において、郷土作家・伊達孝太郎や瑛久の作品が、作家にまつわる写真や、新聞記事、手紙といった資料と共に丁寧に紹介され、調査研究活動を積み重ねる大切さを改めて感じた。

また、北九州市立美術館「コレクション展Ⅱ 特集 Re:1993」（8 月 26 日～12 月 17 日）は、主要な所蔵品であるクロード・モネ《睡蓮、柳の反影》やフランク・ステラ《八幡ワークス》を中心に、作品が所蔵された時代を振り返るというユニークな切り口であった。同館では広告ディレクターや舞台衣装デザイナーとして活躍した石岡瑛子の本格的な回顧展「石岡瑛子 I デザイン」展（9 月 9 日～11 月 12 日）も開催された。近年、美術館で展示される分野は、デザインや建築、ファッション、サブカルチャーまで多岐にわたり、その傾向は来館者からも求められているように感じる。久留米市美術館「アーツ・アンド・クラフツとデザイン ウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで」展（6 月 17 日～8 月 17 日）へ伺った際には、若い世代のデザインへの関心が垣間見られた。広げるとポスターになる魅力的な仕様のチラシは、飾っておきたくなる素敵なおデザインであった。同展では福岡の工芸や民藝運動とからめた講座も開催されたようだ。

コロナ禍の落ち着きに伴い、参加型の作品や他の鑑賞者とのコミュニケーションを楽しめる企画

も復活している。鹿児島県霧島アートの森「飯川雄大展 デコレータークラブ：未来のための定規と縄」（7 月 14 日～9 月 10 日）では、鑑賞者がロープを引っ張る、ハンドルを回すなどの行為に参加することで、作品が動き、形態が変化していくインスタレーションが展示された。当館でも「夏フェスタグチアートコレクション」展（8 月 10 日～9 月 10 日）にて、鑑賞者が実際にチェスを行えるオノ・ヨーコの作品を展示したほか、「ひろしま美術館コレクション 日本近代洋画の名作」展（10 月 6 日～11 月 12 日）で対話型鑑賞のイベントを行った。閉館後の夜に実施した大人向けの回ではスパークリングワインを提供し、参加者は初対面ながら打ち解けた雰囲気でも語り合っていた。

昨今、2023 年の博物館法改正にみられるように、地域や異分野との連携を通じた、より開かれた美術館の在り方が求められてきている。九州ブロックでは、九州産業大学美術館を中心に、医療

や福祉における地域の博物館の活用について講座や研修会が開催され、当館も会場の一つとなった「博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発のための学芸員研修会」（7 月 28 日～11 月 13 日）では、園芸療法を取り入れたワークショップなどを体験した。「美術館は心の病院」という猪熊弦一郎の言葉を思い出すが、社会教育や文化観光の場であることに加え、地域のサードプレイス（家庭や職場・学校と異なる、居心地よくリラックスできる第三の場所）としての美術館を考えることは、新たな来館者の開拓にもつながっていくだろう。

今回の報告は、限られた地域や館への言及に留まってしまった点、何卒ご容赦頂きたい。久しぶりに訪れられた館もあり、各館の活動に大いに刺激を受けた。来年度、当館は開館 70 周年を迎える。これからのヒントを得るためにも、各館の取組みについて更に注視していきたい。



鹿児島市立美術館 対話型鑑賞のワークショップ
高校生対象



鹿児島市立美術館 対話型鑑賞のワークショップ
大人対象

保存研究部会

邊牟木尚美（へむき なおみ・国立西洋美術館）

前回の報告以降、保存研究部会では2023年3月20日（月）に第37回学芸員研修会を開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、国立西洋美術館講堂での対面とZoomを利用したオンラインのハイブリッド方式で開催し、対面52名（関係者を含む）、オンライン265名（正会員232名、正会員以外33名）もの人々が参加した。現在、今年度内の報告書発行に向けて、事務幹事を含む報告書作成チームで編集作業に取り組んでいる。

今年度は第1回（通算第57回）の会合を全国美術館会議（以下「全美」）社員総会開催に合わせ、2023年5月26日（金）に愛知県美術館/愛知県芸術文化センターで開催した。会合後、企画幹事であり愛知県美術館職員の栗名彩香氏、全美災害対策委員でもあり愛知県美術館職員の副田一穂氏、および保存研究部会長であり愛知県美術館OBである碧南市藤井達吉現代美術館長の木本文平氏に建築当初のエピソードを交えながら愛知県美術館のバックヤードを案内していただいた。修復室、写真室、収蔵庫は、広々として整理整頓が行き届き、感嘆と羨望の入り混じった参加者のため息があちこちで聞かれた。また、平ゴムを活用した絵画ラックの作品固定方法をはじめ、作品収納のさりげない工夫は、各館でもすぐに取り入れられる身近なアイデアであり、大変参考になった。



第37回学芸員研修会（国立西洋美術館）

第2回（通算第58回）会合は、本来なら年度後半に開催するところ、以前から開催地候補となっていた川崎市民ミュージアム（以下KCM）が9月に仮施設へ移転するというアナウンスを受け、急遽、移転作業に多大なる支障にならない時期である8月8日（火）にKCMにて開催した。会合、学芸員研修会報告書作成のための協議後、部会員でありKCM保存修復担当の貝塚建氏と羽生佳代氏に被災した建物とレスキュー作業の様子をご案内いただいた。壁や床に被災時の水位がわかる痕やカビ痕が残る収蔵庫内を拝見した時には、被災の凄まじさを思い起こさせた。この機会を利用し、前日の8月7日（月）もしくは9日（水）に、部会員のうち希望者がKCMでの全美レスキュー作業に参加し、KCM職員指導のもと冊子資料の解体、記録および水洗を行った。

昨年度後半から今年度にかけて、外部講師を招いての講演会を中心とする通常の部会合開催とは異なる内容であったが、学芸員研修会報告書作成で原稿を熟読する機会を得ると共に、被災したKCM建物を改めて拝見し、レスキュー作業に参加することで、災害に対する日ごろの備えがいかに重要であるかを再認識した。来年度以降は通常通り年2回の部会合開催を予定している。



第58回会合（川崎市民ミュージアム）施設見学

教育普及 研究部会

鈴木麻里子（すずむら まりこ・三重県立美術館）

前回の活動報告後、教育普及研究部会はオンライン形式の会合を1回、対面形式の会合を2回開催した。以下、それぞれの会合プログラムについて簡単に報告する。

2022年12月12日に開催した通算58回目の会合（オンライン）では、政策研究大学院大学の垣内恵美子氏をお招きし、「フランス、アメリカ及び日本の文化観光」をテーマにご講演いただいた。質疑応答の後はグループに分かれ、講演内容を踏まえた意見交換を行った。

続く通算59回目の会合は、2023年3月14日・15日に国立国際美術館と大阪市立自然史博物館で開催した。

初日はまず大阪中之島美術館の活動や施設について同館の高柳有紀子氏が紹介。同館の施設見学後、国立国際美術館の教育普及活動について同館の藤吉祐子氏から紹介があった。

2日目午前は、横浜美術館（当時）の端山聡子氏が、学芸員研修会や教育プログラムの企画にかかる基本的な考え方についてレクチャーを行った。午後の前半のプログラムは、大阪市立自然史博物館職員の方々による同館の活動紹介。横川昌史氏からは友の会の活動について、釋知恵子氏からは学校連携や活動の評

価について、佐久間大輔氏からは博物館のミッションとコミュニケーションについてのお話を伺った。最後は、学芸員研修会で取り上げたいテーマについてグループディスカッションを行い、全体でその内容を共有した。

2023年度からは、中村貴絵氏（横須賀美術館）と吉澤菜摘氏（国立新美術館）より、細矢芳氏（アーティゾン美術館）、青山由貴枝氏（長野県立美術館）、報告者の3名が部会幹事を引き継ぐこととなった。2023年度は教育普及研究部会が学芸員研修会の企画を担当するため、例年2回開催している会合の回数を1回に絞り、研修会の内容を検討する有志のメンバー約20名で議論を重ねている。11月9日にはアーティゾン美術館にて検討メンバーによる打合せを、翌10日は部会メンバーが参加する会合を開催。会合では研修会テーマ「利用者と美術館（仮）」や分科会テーマ（展示、学び、アクセシビリティ）について、検討状況の共有とグループディスカッションを行った。会合後は検討メンバーが3つの分科会の担当に分かれ、分科会プログラムの具体的な検討に移っている。研修会の参加者が「利用者」について主体的に考え、新たな知見を得られる機会となるよう、メンバーと協働しながらプログラムの検討を進めていきたい。



第59回会合（大阪市立自然史博物館）



第60回会合（アーティゾン美術館）

情報・資料 研究部会

鴨木年泰（かもぎとしやす・東京富士美術館）

情報・資料研究部会では2023年2月3日には部会員14名、事務局1名が参加し、大阪中之島美術館を会場に対面のみによる施設見学会のち、続けて第61回部会合を対面とオンラインによるハイフレックスによって開催した。コロナ禍以降久しぶりの開催となる見学会となり、山梨絵美子新部会長をはじめ多くの部会メンバーが参加し盛会となった。第一部として開催した大阪中之島美術館アーカイブズ情報室見学会でははじめにワークショップルームにて菅谷富夫館長、松山ひとみ氏より活動紹介があり、その後2班に分かれてアーカイブズ情報室の視察と実際に資料を保存している収蔵施設の見学が行われた。詳細は全国美術館会議ホームページの部会報告（下記QRコードからリンク）をご覧ください。

本年度も昨年度に続き8月25日に内閣府と国立国会図書館が主催するオンラインイベント「デジタルアーカイブフェス2023」が開催され、同イベントにおいて、全国美術館会議をつなぎ役にデータ連携している東京富士美術館の「収蔵品データベース」がデジタルアーカイブジャパン・アワード※1を受賞したことが発表された。つなぎ役の実務を担う部会としても、一層デジタ

ルアーカイブの整備・活用推進の機運を高めていく取り組みを加速して行きたいと考えている。

今後の活動予定として、本年度内2024年1月11日に国立アートリサーチセンターとの合同会議を第62回部会合を兼ねて開催する予定である。対面とオンラインを併用したハイフレックスでの開催を予定し、第一部として国立アートリサーチセンターの事業紹介・質疑応答、また改正博物館法と「デジタルアーカイブ」をテーマに川口雅子氏の発表を予定している。第二部の部会合では特に令和6年度の学芸員研修会の企画内容及び今後の部会活動の計画と、第一部の合同会議の内容を受け、今後の国立アートリサーチセンターとの協働についての協議を行いたいと考えている。

一昨年12月1日に全国美術館会議ホームページ上に公開を開始した『全国美術館会議会員館 アーカイブズ資料所在一覧2022』（全美アーカイブズ一覧2022）※2については今後の継続的な調査活動、情報更新のあり方の検討を進めていく予定である。

※1 <https://jpsearch.go.jp/daj-award-2023>

※2 https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=93&d=20



2023年2月3日 施設見学会（大阪中之島美術館 ワorkshopルーム）



第61回情報・資料研究部会合報告
報告：長名大地氏 QRコード

小規模館 研究部会

坂本博孝（さかもとひろたか・絹谷幸二 天空美術館）

小規模館研究部会では、基本的に毎年2回の活動を行なっている。全国美術館会議の総会時に総会開催地にて開催する会合と、主幹事の美術館所在地にて開催する研修会及び会合である。会合では活動計画や予算、各館の情報共有をして意見交換を行ない、研修会ではテーマを決めて講演会や討論を行っている。

第54回会合は、総会翌日の5月26日に徳川美術館に会場をお借りして実施した。

昨年度の主幹事館の市立小樽美術館より、令和4年度の活動報告と決算報告があった。続いて本年度の主幹事館の絹谷幸二天空美術館より、令和5年度活動計画として第55回研修会・会合における研修会のテーマは「作家と美術館」とし、現存作家と展覧会を作っていくプロセスのケーススタディを共有する場にしたいと説明を行い、質疑応答の上で共有した。併せて今年度の予算の報告をし、いずれも承認された。

次に令和5年度幹事館の市立小樽美術館から有島記念館への交代と、新規加盟館として郷さくら美術館を承認した。退会希望館はなかった。その後、各館の最近の取り組みや課題など、近況報告による情報共有を行った。また令和7年度の学芸員研修

会は小規模館研究部会が担当することを確認し、次回の会合時にテーマとして取り上げて準備に取り掛かることにした。

もう一つの主幹事館を会場とする第55回研修会・会合は、2024年1月10日、11日の2日間にわたり、絹谷幸二天空美術館で開催した。

初日の研修会は、テーマを「作家と美術館」とし、現存作家の名前を冠した美術館に限らず、現存作家と協働で展覧会を開催するケーススタディなどを通して、作家と美術館の関係性のあり方を考えた。まずは天空美術館の名誉館長であり文化勲章受章画家の絹谷幸二氏より基調講演「美術館への提言」を開催。北鎌倉葉祥明美術館の「葉祥明展」、奈良県立美術館の「野田弘志展」の2館から事例発表があった。

2日目の会合は、令和6年度活動計画及び予算に加え、令和7年度の学芸員研修会についても討議し、午後は大阪中之島美術館や高島屋史料館などの近隣施設を視察した。

研修会はオブザーバー参加も含め多くの方が参加し、現存作家と美術館のより良い関係性のあり方を共有する機会となった。



第54回会合（徳川美術館）



第55回研修会・会合（絹谷幸二 天空美術館）

美術館運営 研究部会

安田篤生（やすだ あつお・奈良県立美術館）

2023 年度から名称を美術館運営研究部会（以下「MRG」、旧名称は「美術館運営制度研究部会」と改めた当部会だが、2023 年は一度も部会会合を開かないままに終わりそうである。とはいえ、部会としての活動をまったくしていなかったわけではなく、そのあたりをこの場でご報告申し上げたい。

まず、時間軸としては少し遡るが、本誌 23 号に掲載した前回の部会活動報告には間に合わなかった、第 36 回部会会合（2022 年 12 月 2 日オンライン開催）のことから始めさせていただきたい。この会合での主な話題として、一つには、2023 年 4 月施行となった改正博物館法のことがあった。もう一つに、法律制定（2011 年）から 10 年余りが経過して問題点も色々見えてきた美術品国家補償制度のことがあった。

後者についてはその後、MRG の浅野秀剛部会長（大和文華館）が主となって、2023 年 3 月に文化庁の担当部署と美術館側とで話し合う場を持つに至ったことを報告しておきたい。美術館側は浅野部会長の他に MRG メンバーではない複数の国公立の美術館長または副館長にも入っていた。文化庁としては現行法をいきなり変えるのはなかなか難しいという姿勢であるが、制度を適用する展覧会の数を増やしたいという気持ちがあるという。話し合いの場で美術館側からも意見や要望を出した結果、「申請手続の煩雑すぎる負担の軽減」や「審査基準を緩和あるいは是正する必要性はあるだろう」など、ある程度両者で一致した部分もあった。今後も引き続き、話し合いを続けていきたいと考えている。

さて、改正博物館法に関連しては、2023 年の改正は博物館登録制度の見直しが中心であって、学芸員制度の見直しについては棚上げということは読者諸氏もご存じであろう。

現在、専門職としての学芸員の位置づけに課題がある点について異論はないと思う。美術館のための専門職は学芸員以外にも必要ではないかという考えもあ

ろう。一方、個々の美術館における学芸員の絶対数がやはり少ないことや、近年は特に雇用形態も問題となっている。そこで MRG では「学芸員の現場における今の課題、そして今後望ましいこと」について、幾つかの美術館をピックアップして学芸員に聞き取り調査をしよう、ということになった。

そして 2023 年の春から夏にかけ、地域や設置者別のバランスを考慮しつつ数十館を選び、MRG メンバーの数名で手分けして対面やメール等による聞き取り調査をさせていただいた。聞き取り対象となった方々にはこの場であらためてお礼を申し上げたい。その後、聞き取り結果をまとめて整理を行い、2024 年になってから部会会合を実施し、MRG としてのレポートを仕上げていく方向で考えている。忌憚ない意見を聴くために館名・個人名は公表しないという前提で調査をしたため、レポートもそのような形になる予定である。

最後に、前回の報告ではメンバーの拡充が喫緊の課題であるとしたが、幸いにも 2023 年には新しく数名のメンバーをお迎えすることができた。その一方で部会会合をこの 1 年実施できていないのは残念であるが、今後もこつこつと活動を続けていきたいと思っている。とはいものの、私は現職を今年度末で退任予定であり、MRG 幹事として報告を書くのも今回が最後になるだろう。次の幹事となる方に期待しつつ、今回の報告を終わらせていただくことにする。

地域美術 研究部会

重松知美（しげまつ ともみ・北九州市立美術館）

地域美術研究部会は、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針及び目標のもと、活動を行っている。

当部会の活動報告として、まず、2023 年 3 月に『第 36 回学芸員研修会報告書 なぜいま、地域美術を研究するのか——「地方」への視点と地域美術研究の実践例』を発行した。田中修二氏、佐々木奈美子氏、杉浦友治氏による 3 件の講演とパネルディスカッションの模様を収録。巻末にはウェビナー開催時に寄せられた主な質問やご意見についてもまとめたので、ぜひご一読いただきたい。

次に、部会合については、年 2 回ペースで全国の各ブロックを巡り、地域美術研究への理解を深める活動を行っている。第 14 回会合は、2023 年 2 月に大阪中之島美術館を会場に開催し、林野雅人氏（大阪中之島美術館）と小川知子氏（同）に登壇いただいた。まず林野氏の発表「大阪の日本画の可能性」は、同館準備室時代から蓄積されてきた収集と研究を基に企画された「大阪の日本画」展について紹介。次に、小川氏による発表「予告『女性画家たちの大阪』展について」では、長らく大阪の女性日本画家たちについての調査研究を重ねてこられた歩みを紹介。そ

れらの集大成として 2023 年冬に「決定版！女性画家たちの大阪」展を開催されるとのことであった。

続く第 15 回会合は、名古屋市美術館にて開催し、3 氏に登壇いただいた。深谷克典氏（名古屋市美術館）による発表「名古屋市美術館のコレクションについて」では、同館の開館前から現在までの収集活動のほか、開館から 30 年間の購入予算から見た美術館運営の変遷を報告いただいた。続いて森本陽香氏（同）による「山田光春のガラス絵について」では、所蔵作家、山田光春の 1930 年代の作例についての発表。最後に石崎尚氏（愛知県美術館）の発表「（インター）ローカルなハブとしての文化会館」では、愛知県美術館の前身である愛知県文化会館の活動について発表され、当時の企画展がまさに時代の動向と結びつくものであることがわかり、興味深い発表だった。

会合の最後に部会員協議を行い、昨年からの議題となっている、当部会のこれまでの発表をまとめた報告集発行の計画が進んでいることを報告した。地域美術研究に関する情報共有もまた、当部会に求められる使命の一つであるが、本件は現時点では未定事項も多く、今後具体的に詰めていきたい。



第 14 回会合（大阪中之島美術館）



第 15 回会合（名古屋市美術館）

Study:

ヒトはなぜアートが見たいのか。

Study:大阪関西国際芸術祭

Study:Osaka Kansai International Art Festival



主催：株式会社アートローグ・独立行政法人日本芸術文化振興会・文化庁

追悼 原田平作先生

去る9月26日、原田平作前愛媛県美術館名誉館長が逝去された。享年90歳。ここではいつもどおり、原田先生と呼ばせていただくが、原田先生は高齢にもかかわらず常に矍鑠とされており、この夏にも先生にお声がけいただいたある講演の後でコーヒーを御一緒にしたばかりであったから、にわかには信じられない思いだ。

原田先生は1933年の生まれ。京都大学文学部美学美術史専攻博士課程を経て、長く京都市美術館に勤務された後、愛媛県美術館館長、大阪大学教授なども歴任され、全国美術館会議でも2001年より2010年まで理事をお務めになった。

機関誌『ZENBI』と原田先生の関係は深い。私が鳥取で勤務を始めてまもなく、2009年に原田先生は休眠状態にあったニュース研究部会を再開すべく当時京都国立近代美術館の庶務課にいらっしゃった松山利光さんと私を含む旧知の美術館職員数名に声をおかけになって、紙媒体による批評や広報の可能性について議論した。外部講師を招いた研究会を重ねる中で次第に全国美術館会議独自の機関誌を発行する機運が高まり、ついに東日本大震災の直後、2011年8月に創刊号を発行することとなった。『ZENBI』では校正が出そろった時点で、部員が集まって表記の統一と原稿の最終確認のための会議を開く。京都国立近代美術館や国立国際美術館、時には鳥取まで足を延ばして開かれた校正会議が終わると街へ繰り出して会食を楽しむのが常であったが、その中心には常に原田先生がいらっしゃった。経験と知識に根ざしたお話と明晰な語り口にはいつも引き込まれたことを覚えている。愛妻家の原田先生はいつも奥様に気を遣っていらっしゃる様子が微笑ましく、

尾崎 信一郎（おさき しんいちろう・鳥取県立美術館整備局）

いつであつたのだろうか、皆で入ったお好み焼き屋で帰りがけに「ワイフへ」とおっしゃって、おみやげのお好み焼きを包んでいらっしゃったことを懐かしく思い出す。

今から思えば原田先生が機関誌の発刊と関わられたことは必然であった。先生は東京に一極集中する感のある美術ジャーナリズムに風穴を開けるべく、御自身でも『視覚の現場』、『美術フォーラム21』といった美術と関わる雑誌を次々に発行された。執筆者は関西に偏ることなく日本中から選ばれ、注目すべきは美術館学芸員と大学関係者のいずれもが論考を寄せていた点である。美術館と大学で長きにわたって勤務された原田先生の人脈が可能とした執筆陣の厚みはほかに例をみない。しかも退職後の余技ではなく、醍醐書房という出版社を自ら立ち上げ、資金や組織をしっかりと準備したうえでの出版活動である。さいわいこれに関しては、きょうと視覚文化振興財団という公益財団法人に引き継がれているから関西発の美術ジャーナリズムの礎はしっかりと築かれたといつてよいだろう。

学芸員という仕事を続ける中で多くの尊敬すべき先輩を知ったが、学芸員としての体験と学識はいうまでもなく、原田先生は視野の広さと実行力において抜きん出た。思うに先生のお仕事には常にマネジメントという発想があつたのではなからうか。美術館、大学、出版といった異なった現場でそれぞれに着実な成果をあげられたゆえんであろう。

いつかの校正会議の席上、全国美術館会議の草創期についてどなたかに聞き取りをすることの必要性を強く訴えておられたことを覚えている。その仕事をいまだ果たせないうちに、その時代を知る先輩がまた一人天に召された。

防災を見つめて 100 年

はじめまして、今年度から賛助会員としてお世話になりますエア・ウォーター防災(株)と申します。よろしく願い申し上げます。さて、私共エア・ウォーター防災(株)は、大正13年の創業以来、「人の生命と財産を守る」を企業理念とし、長年培ってきた「高圧ガス制御技術」をベースに「消火装置・医療装置・呼吸器」の各分野で事業展開するメーカーです。医療装置では、手術室や医療ガス配管設備を手掛けており、国内病院の約半数に弊社製品を納入させていただき日本の医療に貢献しています。また、呼吸器では、消防隊が使用する空気呼吸器を中心に国内シェア80%を有しており消防行政に貢献しています。消火装置では、ガスを使った特殊消火設備を主力とし、美術館・データセンター、発電所など水損を防ぎたい建物に多数納入させていただいております。

さて、本題に入りますが、私どもは防災メーカーとして約1世紀の間、火災と向き合って参りました。火災原因は時代に応じて変化するため、常に最先端の知見と技術で対応しなければなりません。例えば、昔から火災の主な原因である放火は、ここ10年で三分の一まで減少しました。代わってリチウム電池による火災が約30倍になるなど電気機器に関する火災が増加しています。今やパソコン・スマートフォンをはじめ多くの電気機器が身近で使用されており、いつどこで火災が発生してもおかしくない状況となっています。

近年では、大変悲しいことですが、首里城やノートルダム大聖堂が火災で焼失いたしました。首里城の火災原因は不明となっていますが、1階で通電し

ていた延長コードと、その先のLED照明器具で何らかの異常があり出火した可能性があると言われています。

一方で、火災とは別にスプリンクラー設備など消火設備の誤作動による水損事故も発生しています。一例としては、2022年9月24日に静岡県裾野市文化センターの大ホールでスプリンクラー設備が突然誤作動し、舞台と舞台裏に大量の水が放水されました。当時オーケストラの演奏会直前で、演奏者5名が転倒でけがをし、楽器約100点が水をかぶり数億円の被害が出ました。このような災害は、自然災害と異なり防ぐことができます。皆さんは、美術館内の消火器が設置されている場所や屋内消火栓の使い方などご存じでしょうか。普段使用しない設備ですからなんとなく知っている程度の方が多くのではないのでしょうか。火災初期対応の三原則は、「早く知らせる(119番通報)」「早く消す(初期消火)」「早く逃げる」です。特に初期消火の対応によりボヤで済むか、火災になるか結果が分かれる場合があります。日頃の消防訓練参加や各地の消防機関が運営している災害体験施設で体験いただくだけで、緊急時の冷静な対応が可能となります。また、弊社も神戸に体験施設を所持しておりますので、体験や防災に関するご相談があればお気軽にお声がけください。最後になりますが、本誌を機会に皆様が少しでも防災設備に興味を持っていただき、美術品・文化財の保護につながれば幸いです。

福井 浩明 (ふくい ひろあき・エア・ウォーター防災)

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社 [出版業]	
エア・ウォーター防災株式会社 [製造業]	カトーレック株式会社 [一般貨物自動車運送業]
光明理化学工業株式会社 [製造業]	株式会社DNPアートコミュニケーションズ [サービス業]
株式会社伏見工芸 [展示装飾業]	ヤマト運輸株式会社 [美術品輸送]
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ [美術展企画等]	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団 [製造業]
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク [展覧会企画制作]	大日本印刷株式会社 [総合印刷業]
イセ文化財団 [芸術・文化振興]	株式会社東京美術倶楽部 [貸会場業等]
株式会社NHKエデュケーショナル [映像を中心とするコンテンツ制作]	凸版印刷株式会社 [製造業]
株式会社NHKプロモーション [展覧会等のイベントの企画・制作]	株式会社トップアート鎌倉 [額縁額装・画材]
株式会社加島美術 [美術商]	株式会社パレット [文化財の保存修復用品 製造と販売]
協同組合美術商交友会 [美術業界団体]	ピープルソフトウェア株式会社 [情報通信業]
株式会社グッドフェローズ [Webチケット販売、発券精算システム]	株式会社美術出版社 [出版事業]
株式会社熊平製作所 [製造業(収蔵庫設備・入退館ゲート)]	本州四国連絡高速道路株式会社 [運輸業]
株式会社クレヴィス [展覧会企画・出版]	有限会社丸栄堂 [美術商]
株式会社広済堂ネクスト [情報・印刷]	株式会社ユニークポジション [情報サービス業]
金剛株式会社 [製造業(保管機器・銅製家具製造)]	株式会社レンブラント [画廊]
進和テック株式会社 [ガス対策機器販売]	早稲田システム開発株式会社 [ミュージアム向けITサービス提供]
一般社団法人全国美術商連合会 [美術業界団体]	
アート印刷株式会社 [デザイン・印刷・出版業]	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 [印刷業]
イカリ消毒株式会社 [サービス業]	読売新聞東京本社 [新聞]
M&Iアート株式会社 [美術商]	ライトアンドリヒト株式会社 [照明器具販売]
株式会社ギャルリーためなが [画廊]	
有限会社アート・フリース [グッズ制作・販売]	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」[出版]
株式会社アートローグ [コンサルティング業]	株式会社丹青研究所 [サービス業(コンサルタント)]
影山 幸一 [アートプランナー]	株式会社T Tトレーディング [HOGOS]
株式会社学研プラス [出版]	トライベクトル株式会社 [翻訳サービス業]
株式会社求龍堂 [出版・デザイン業]	株式会社美術年鑑社「新美術新聞」[出版業]
株式会社キュレイターズ [企画・デザイン・コンサルタント]	

2023 年夏・秋の全国美術館会議

企画担当幹事 大越久子（おおこし ひさこ）

5月下旬に名古屋で開催された定時社員総会後の運営状況についてご報告します。

酷暑にあえぎ、終わりの見えない戦禍に心を傷める日々であったことは記憶に新しいですが、異常気象や世界の情勢は引き続き私たちにも強い影響を及ぼしています。アフター・コロナを待ちながらおよそ3年が過ぎ、ひとまず以前のような美術館活動に戻ったように見えますが、こうした変動が事業内容や財政状況に影を落としている例も少なくありません。

さて、この半年間、事務局では対外的に大きな動きはありませんでした。文化庁に対しても特に「物申す」機会がなく、残念なほどです。

それぞれの専門委員会や研究部会については、別稿をご一読いただければ、美術館が抱えている諸問題に取り組み、活発な意見・情報交換、調査などを着々と継続していらっしゃるご理解いただけるでしょう。専門委員会や研究部会は各々のルールに則って自主的に運営されているので、その内容に対して事務局が口出しすることはなく、滞りなく活動を進めることができるように経費や場作りに協力しています。会員に直接関わる役割に鑑みて研究部会から独立した広報と災害対策は、委員会組織となってから動きがよりスピーディになったと感じています。

さて、全国美術館会議（以下「全美」）は、現場で尽力している諸職員を支援し、よりよい美術館運営に寄与するべく存在しています。そのために事務局は、法人化後に加速した活発な活動を支える財政基盤と人的体制を整えねばなりません。しかし日々の業務に追われ、専門性や熟慮を要する懸案事項の解決に集中して取り組むことができないのが現状です。また、各専門委員会や研究部会も低予算で活動しており、それはとりも

なおさず、メンバー個々人の負担によるところが大きいということです。まるで美術館運営の縮図みたいなものですから、あまり愚痴は言えません。しかし、理事会、専門委員会、研究部会諸氏の発想をいかに後押しし、全美が会員館の情報共有や交流あるいは連携の場として、より充実した機能を発揮していけるかどうかは、資金と人員の整備にかかるところ大であるには違はなく、事務局の予算と人の確保が一層求められています。

これは大きな宿題ですから、今日明日中にというわけにはいかないものの、徐々に解決を試みています。財政面では、会長や理事、事務局長が新入正会員の勧誘はもちろん賛助会員の獲得に努めており、美術関係の財団や企業に足を運んで成果をあげつつあります。また、賛助会員ほど多額ではありませんが、個人会員の増加も目指しています。個人会員は、勤務先の美術館が全美に入会していない方や、美術館を「卒業」した後も美術館との関りを持ちたいと望む方たちに門戸を開いています。広報委員会ですでに機関誌への投稿規程を改定し、個人会員や賛助会員の寄稿を歓迎しています。また、ホームページの閲覧制限の緩和も準備中で、個人会員のメリットは広がりがつあります。その一方で、より多くの情報が共有されるわけですから、入会に必要な資格に過不足がないか、並行して推薦基準等を精査しています。

事務局の体制については、増加の一途をたどる業務量を速やかに処理するために専従職員をもつ1人加え、事務分担を見直すことが喫緊の課題です。現在、事務局は4人体制の態ですが、実際に日々の仕事を担っているのはわずか1名の常勤職員です。これをたとえば2名にすれば、一般的な美術館に総務担当と学芸担当が配置され、それを統括する副館長がいるというようなイメージ

に近づきます。しかしこれもまた、予算の裏付けなしには実現できません。

全美が一般社団法人となって早や3年半。正会員数も410館を超えました。会員館の交流の場や、美術館界の潤滑油めいた機能も深化し、活動の基盤は固まりつつあります。全美が会員に対して、有形無形にどのようなメリットを提供で

きるのかを明文化するのは簡単でなく、そもそも生産性を問うべきでない美術や美術館の必要性を説くこと自体が容易くありません。そのような情勢の中で、全美がさらなる成熟を期すためにも、これから果たすべき役割やその優先順位をあらためて見直し、より安定した運営形態を模索する時期にきていると痛感しています。

専門委員会から

広報委員会から

広報委員会委員 遊免寛子（ゆうめん ひろこ・兵庫県立美術館）

広報委員会は、ホームページと機関誌『ZENBL』を通して、全国美術館会議（以下「全美」）の活動の広報を担当している。広報委員会のメンバーは、機関誌の企画・編集を行う機関誌担当と、ホームページの内容を点検し改善するホームページ担当の大きく二つに分かれている。今回はホームページ担当の活動について報告したい。

まずホームページ担当のあゆみを振り返りたい。当担当は、全美のホームページ開設を機に立ち上がった。2004年10月「ホームページ開設・運営研究部会」を設立、2005年度には文化庁の助成金を得て過去の印刷物をデジタル化、2006年ホームページを開設した（詳しい経緯はホームページ「組織と活動」→「過去の研究部会」→「ホームページ部会」を参照のこと）。現在の目的は、大きく分けて以下のようなものである。①全美の組織としての議論、決定事項を迅速に会員に公開すること ②全美の資産（印刷物）をアーカイブ化すること ③会員館の情報共有の場に加え一般へのアピールの場となること ④会員館の情報の集積場所となること（各館のホームページ、収蔵品目録総覧、収蔵資料目録等）。最新ニュースや各部会の活動報告の掲載等、ルーティンの更新作業は事務局で行っているため、ホームページ担当の活動は、より大きな視点で改善点を見つけ、その具体的な内容を考えることである。とはいえ、筆者にはホームペー

ジの専門的な知識が無く、どちらかと言えばアナログ人間であることから、「素人目線」で使いやすくなりやすいホームページを心掛けています。現在、ホームページ担当はメンバー7名、オブザーバー1名を中心に活動している。広報委員会に再編成されたことを受け、機関誌担当にも随時情報を共有して進めている。

来年度で活動開始から20年を迎え、充実したコンテンツを持つ全美ホームページであるが、残念ながら会員館のメンバーに、ホームページを十分に活用いただけていないのが現状である。そこで最後にホームページ担当メンバーから寄せられた、日常業務で使えるオススメコンテンツを紹介したい。

- ・「正会員館一覧」：加盟館のホームページに最短でアクセスできる。
- ・「アーカイブズ資料所在一覧 2022」：展覧会の企画時、論文執筆時の確認に便利。
- ・「収蔵品目録総覧 2014」：目録の有無の確認に。その他、各部会作成のメンバー向けコンテンツ
- ・「むし・かび対策ノート」、「国内版ファシリティ・レポート」、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」（いずれもログイン[※]後、バナーをクリック）

※ログインIDとパスワードは各館での管理となっているので、不明の場合は館内の担当者にご確認ください。担当が不明の場合は事務局まで。

総合調査報告書が教えてくれる災害対策

災害対策委員長 田中善明（たなか よしあき・サイトウミュージアム）

災害対策は、自館の立地条件や建物の構造、作品の性質などを知って、自分たちでマニュアルを作って試してみる、というのが基本である。どこかのもっともらしく見えるマニュアルをそのまま転用するより、たとえ拙くても自分たちで状況を観察しイメージして作り上げたものの方が、その苦労ゆえに忘れにくくなるし、動きも実情に即したことになるからである。

とはいっても、美術館で被災経験やレスキュー経験のない美術館職員が災害を細やかにイメージするのは難しい。人命にかかわる危険箇所がどこにあるのか、作品の被害をなるべく少なくするためにはどこから改善するのがよいのか、災害が起きた場合にスタッフはどう行動すればよいのか。

こうした課題に取り組むにあたり、とても参考になるのが全国美術館会議で発行した美術館・博物館総合調査報告書である。阪神・淡路大震災と東日本大震災で激震地域内にあった施設が「将来の災害対策に資するのであれば」との思いで開示された被害状況を、他館の学芸員が現地を視察し聞き取り編集した成果物で、旅費や印刷費はいずれの報告書も多方面からの寄付金等で賄われた。

『阪神大震災美術館・博物館総合調査』は各館の被害事例が掲載された報告書Ⅰ（1995年発行）と、作品の種類別や展示ケースなどの備品に分けて考察した報告書Ⅱ（1996年発行）からなり、これらを参考にしてその後減災の取り組みを行った美術館も多い。『東日本大震災美術館・博物館総合調査報告』（2014年発行）は災害の規模や範囲が大きかったことから本格的な調査は発災から2年が経過していたが、開館時間中のスタッフの対応や水損被害の事例なども加

わり、緊迫した当時の状況を窺い知ることができる（全国美術館会議ホームページ会員館ページ内にて公開）。

日常の仕事に忙殺され、こうした報告書を落着いて読む余裕はおありでないかもしれない。しかし、これらの報告書には、私たちのイメージを超えた情報や知恵がいくつも掲載されていて、読まないともったいないし結局は確実な減災への近道となるはずである。たとえば、激震地であってもしっかりとした地盤の上に建てられた美術館の建物や作品の被害は比較的少なく、軟弱な地盤であっても建物の基礎杭（パイル）が深く数多く打ち込まれた施設も同様に地震による作品の転倒が少なかった。ところが、建物周囲の地面の隆起や、被害のなかった建物と軟弱な地盤とをつなぐ配水パイプが破断した事例が見られた。自館が似たような構造であれば震災時に何が起りうるのか想定することが可能となる。その他にも、展示中の絵画作品は振動によりどのような動きでどこから外れてしまうのか、どういった展示ケースが転倒したのか、免震台にただ作品を載せただけでは安心ではないことや、作品同士の接触事故が多かったので空間に余裕をもたせた展示や収納が有効であることなど、予算が潤沢でなくても改善できる方法が幾通りも示されている。

残念ながら、災害対策は日々経つにつれ少しずつ疎かになり、忘れられていく性質のものでもある。おそらく、それだけを単独の業務として特別視するのではなく、日常の他の業務とうまく絡めながら行うことが定着させる秘訣となろう。たとえば収蔵庫内の整理整頓や転倒防止措置は、地震対策だけでなく日ごろの作品との接触事故等の軽減にもつながるし、その作業に清掃や簡

単な点検を組み合わせれば IPM（総合的害虫管理）とも関係する。展覧会や広報用に作品撮影をする際には、作品の側面や裏面をスナップ写真でよいので記録しておく、万一破損した場合の修復や保険手続きのための貴重な参考データとなりうる。担当者が一人で行うよりも、他のスタッフを巻き込んだほうが防災意識は共有されるし、展示作業が予定よりも早い時刻に終わった際は委託した作業員に作品整理等を手伝ってもらったり、博物館実習やワークショップに組み

込んだりするのも方法のひとつであろう。

災害により作品が損傷してしまったら完全には元には戻らないのはもちろんのこと、記録書の作成、専門家の招へいや救援要請、予算要求に補助金の申請など膨大な手続きが発生する。完璧な災害対策は無理ではあっても、各館が現在おこなっている対策に少し意識をプラスすれば、将来は作品だけでなく自分自身をも大きな疲弊から救ってくれるに違いない。



阪神大震災美術館・博物館総合調査報告 I,II



東日本大震災美術館・博物館総合調査報告

※ 24 号 33 頁の内容に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

誤：「広域ブロック本部館は、理事会で協議して選定し、2 年ごとに選定する」というルール

正：「広域ブロック本部館及び広域ブロック副本部館は、2 年ごとに選定する」「当該館の承諾を受けた上で、理事会の承認を受けるものとする」というルール

賛助会員、個人会員の皆さまへ

昨年、ZENBI 全国美術館会議機関誌の投稿規定を改定しました。新しい投稿規定は次頁のとおりです。

vol.23 より、「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募ることといたします。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。まずは機関誌で vol.22 より業種の掲載を開始しました。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会では準備を進めているところです。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

広報委員会

『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればどなたでも投稿できます。

- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第26号(2024年7月発行予定)については4月30日、第27号(2025年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
ikedai@kanazawa21.jp (池田)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 212-5
倉吉未来中心2階 鳥取県立美術館(美術館整備局)
(一社)全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-47-3011

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

制定：平成23年7月24日
改正：令和4年1月31日
全国美術館会議広報委員会

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
 - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
 - イ 全国美術館会議個人会員
 - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されてないものに限る。
- (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは(一社)全国美術館会議広報委員会(以下「広報委員会」という。)に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右

肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。

- (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は(一社)全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

編集後記

『ZENBI』の25号をお届けする。コロナ禍という前代未聞の危機はようやく沈静化したとはいえ、そこで明確となった問題はなおも継続している。新たな戦争が始まり、輸送費や保険料、展示工作にかかる費用は高騰したまま留まるところを知らず、諸物価の高騰は美術館活動全般にボディブローのように効いてきている。これに対応するかのように入場料も高額化が進み、美術館がすべての市民に開かれた施設とはいえなくなりつつある。今回、「全美フォーラム」に投稿いただいた相澤邦彦氏の文章は美術館からロジスティクスの現場へと移られた氏ならではの問題提起となっている。最近しばしば社会問題化される美術館における作品保管の問題についても大阪府の事例をめぐって鷺田めろろ氏から詳細なレポートをいただいた。いずれも低迷するこの

国、美術館の将来と深く関わる内容である。是非目を通していただきたい。

一方で年末にこの稿を記すにあたり、本年もいくつもの興味深い展覧会に足を運ぶことができたことを思う。厳しい状況の中にあっても学芸員の工夫によって興味深い展覧会が次々に企画されていることは喜ばしい。いつのまにか学芸員としては最年長に属する世代となった私としては、今後も若い学芸員たちの新鮮な取り組みに期待したいと思う。展覧会に限らず、興味深い取り組みについては今後も本誌で紹介していきたいと考える。活発な投稿もお待ちしております。

末尾となるが、追悼記事に記したとおり、本年、本誌の生みの親ともいえる原田平作元理事が逝去された。謹んで御冥福をお祈りする。

(O)

ガスエルファン

展示ケース内の酢酸/アンモニアガスの吸着装置

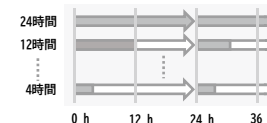


- 壁面展示ケースの端に設置するだけでOK
- 展示品に配慮した低風速での稼働や、連続運転・サイクル運転の設定が可能
- 専用インジケーターで酢酸/アンモニアフィルターの交換時期がわかる

電動ファンによる効率的な空気質改善



10段階の風量調節機能と運転サイクル設定



フィルター交換を示すインジケーター付き



収蔵庫設備・展示設備で
文化財保存をトータルサポート

株式会社クマヒラ
東京都中央区日本橋室町2丁目1番1号 日本橋三井タワー14階
TEL:03-3270-4393 <https://www.kumahira.co.jp/>

Kumahira



エコミュアー FTプレート

文化財虫菌害
防除薬剤認定
第26号

イカリ消毒オリジナルの蒸散タイプの防虫剤。
人体への安全性が高く、少量で効果を発揮します。
効果はながく1年間。
迷惑な文化財害虫を撃退します。



IKARI

イカリ消毒株式会社 <https://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720

世界の名画を 安心・安全に

株式会社 ギャラリー ためなが

東京 〒104-0061 東京都中央区銀座 7-5-4
TEL 03-3573-5368

大阪 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-1 ホテルニューオータニ大阪 1階
TEL 06-6949-3434

京都 〒605-0991 京都市東山区上堀詰町 265-7
TEL 075-532-3001

パリ 18, Avenue Matignon, 75008 Paris
TEL 01-42-66-61-94



galerie taménaga
depuis 1969

WEB www.tamenaga.com
Email gal@tamenaga.com

美術品販売

近現代作家を中心とした多岐にわたるコレクションから、
お客様のニーズに合った作品をご提案いたします

輸入代行

世界中の美術品が集結するパリ。50年以上かけて築き
上げた現地のネットワークを活かし、作品の購入・輸入
のお手続きを代行いたします

作品貸与

これまでに紹介してまいりました近代絵画から現在活躍
中の所属作家まで、様々な作品の展覧会への貸し出しを
承ります

時価査定

半世紀以上の経験から成る厳密かつ公正な評価で、
コレクションの真価を明らかにいたします

丸栄堂

美術商

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<https://www.marueido.com>

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



調査・診断

- ▼博物館・美術館・図書館・寺社等の
環境調査
- ▼調査セットによる環境調査
- ▼昆虫や微生物の同定
- ▼生物の被害調査・診断

資格・認定

- ▼文化財虫菌害防除作業主任者
- ▼文化財IPMコーディネータ
- ▼文化財虫菌害防除薬剤等認定



コンサルティング

- ▼保存環境・防除薬剤

防除処置

- ▼殺虫・殺菌処理の受託
- ▼燻蒸効果判定



研修・普及

- ▼文化財の保存に関する研修会・講習会
- ▼図書の出版



公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp